鳥取大学地域学部附属芸術文化センター事業の成果と課題

― 平成19年度から22年度 ―

佐分利育代*五島朋子*平井　覚*西岡千秋*新倉　健*石谷孝二*高阪一治

Achievements and Challenges of Tottori University Art Center between 2007 and 2010

SABURI Ikuyo*, GOTO Tomoko*,HIRAI Satoru*, NISHIOKA Chiaki*,
NIIKURA Ken*, ISHITANI Koji*, KOSAKA Kazuharu*

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第８巻 第３号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES)Vol.8 / No.3

平成 24 年 3 月30日発行　　March 30, 2012

鳥取大学地域学部附属芸術文化センター事業の成果と課題

—平成 19 年度から 22 年度—

佐分利育代*五島朋子*平井覚*西岡千秋*新倉健*石谷孝二*高阪一治

Achievements and Challenges of Tottori University Art Center between 2007 and 2010

SABURI Ikuyo*, GOTO Tomoko*,HIRAI Satoru*, NISHIOKA Chiaki*,
NIIKURA Ken*, ISHITANI Koji*, KOSAKA Kazuharu*

キーワード：芸術文化センター、地域貢献、生涯教育、学生教育
Key Words: Art Center, Outreach, Life Long Education, Student Education

はじめに

鳥取大学地域学部附属芸術文化センターは、平成 16 年(2004 年)4 月に、国立大学法人鳥取大学地域学部設置と共に誕生した。鳥取という地域を主なフィールドとしつつ、開かれた地域研究の一環として、「地域の芸術文化の振興、その創造と発展継承に役立つための研究と教育を行い」、地域における芸術文化の「頂点の伸張と拡大」に貢献することを目的に設置され、7 年が経過した。この間に、平成 17 年に専任のアートマネジメント担当教員の着任、平成 21 年にセンター施設の整備と、地域文化学科芸術文化コースの新設に伴う、1 学年 4 名の学部生の受け入れがあった。地域学部地域学研究会を中心とした「地域学」研究、教育研究が進められる中、地域学部附属としての芸術文化センターのあり方が問われる時期でもある。設立当時 6 名で出発したセンターは、平成 23 年 4 月現在では、専任教員 7 名に加え、9 名の大学院研究科生と 10 名の学部学生の、計 26 名が教育と研究を追求する場となった。

平成 19 年度に、平成 16 年度から 18 年度の 3 カ年における芸術文化センターの事業報告及び、その成果と課題を検証したが、平成 22 年度末に、その後の平成 19 年度から平成 22 年度の 4 年間の事業報告書を作成した。本稿では、この「鳥取大学地域学部附属芸術文化センター事業報告　平成 19～22 年度」に見られる芸術文化センターの 4 カ年の事業を、平成 19 年度の事業報告で挙げた成果と課題を手がかりに検証すると共に、センター運営と地域文化学科芸術文化コース、大学院研究科地域創造専攻地域文化分野における教育･研究の関係についても検証する。そのことによって、地域学部における芸術文化センターのあり方への指針を得たい。

１．平成 16 年度から 18 年度までのセンター事業の成果と課題

平成 20 年 3 月の「鳥取大学地域学部附属芸術文化センター事業報告　平成 16～18 年度」で、３カ年の事業実施の成果と課題を以下のようにまとめた(芸術文化センター事業報告,2008,pp.88-92 五島執筆分を一部要約)。

*鳥取大学地域学部附属芸術文化センター

1-1　成果

（1）　多彩で多様な事業を実施

①　豊富な事業内容・・様々なジャンル、形態の事業

②　芸術文化に触れる機会の提供・・県内では実施機会の少ない芸術活動の紹介

③　発表の場の提供・・本学の学生のみでなく、子ども、若い世代に研鑽発表の場を提供

④　多様な場所で実施・・学内、学外施設、現在使われていない建物、山間部、中西部等

（2）　事業実施のための工夫

①　財源獲得の努力・・自治体、企業、学内競争的資金

②　事業実施の工夫・・自治体等学外組織との連携、国内外で活躍の芸術家の招聘事業

③　センター教員間の相互刺激・・専門分野を超えた交流

（3）　連携・交流の拡大と進展

①　地域文化団体等との協働・・オペラ協会、アーツデザインとっとり、鳥取県、日南町、文化経済学会、アートマネジメント学会、アート NPO などとの連携、交流

②　教員の活動蓄積を事業化・・事業実施に生かされた各教員の地域での活動実績

（4）　開かれた大学の実践

①　芸術文化へのアクセス拡大・・多様な開催で、芸術文化に身近に触れる機会を提供

②　地域社会に開かれた大学・・アートプラザなど施設活用で、大学に地域の人を招き、リピーターもでき、センターの存在意義を高めた。参加者、講師の交流の場になった。
学外施設の利用など、センター自らが地域社会に出た。

（5）実践を通じた人材育成・教育

①　新たな出会いの創出・・多様な事業を通した芸術活動者、芸術愛好者との出会い

②　技術向上の機会の創出・・芸術活動における技術向上の場、専門的学びの場の提供

③　アートマネジメント実践の場の創出・・実践を通したアートマネジメント教育の場

④　生涯学習の場・・社会人、高齢者が芸術の楽しみを味わう生涯学習の場

（6）施設の充実

①　施設の充実・・音楽教室を改修した「アートプラザ」の活用
１６年度・・椅子、ブラインド、廊下カーペット
１７年度・・プロジェクター、スクリーン、マイク等オーディオ機器、プラザ照明、空調、看板プレート等の新設
１８年度・・センターへのアプローチ野外階段及び雨よけ庇、センター案内板他

②　アートプラザの重要性・・自由に利用できる場所があってこそ、開かれた大学の実践、多様な事業の実施、交流の深化が可能になった。

（7）芸術文化センターの PR

①　センターの認知・・事業の実施、パンフレット、ホームページによるフィードバック

②　県内外への認知・・事業、新聞記事、テレビなどで認知を広げた。

1-2　課題

（1）　計画的な事業の実施
実施日程調整、２，３カ年にわたる事業計画の検討、事業評価が必要

（2）　事業の実施・運営体制の充実
活動による情報蓄積を活かした広報、集客法の効率化と充実、教員相互の連絡と協力に

よるスムーズな事業運営、事務局的なスタッフや当日運営スタッフの充実、メディアとの協力体制の拡充による広報の充実

（3） 参加者の拡大と充実

広報による学内への周知広報、湖山地区住民との連携推進の必要性。

（4） 安定した財源の確保と柔軟な執行体制

学内予算の安定的な獲得、学外予算獲得の努力と実績づくり、芸術文化事業執行のための事務手続きの柔軟性が必要

（5） 連携と交流を促進する仕組みの試行と確立

事業企画運営の深化に向け、参加者の声を反映する企画・実施の試みが必要

さらに積極的に学びたいという参加者と共に展開する事業による地域振興

参加のリピーターとの交流、芸術文化活動への積極的関与への仕組みづくり

（6） 施設の充実

教室を改修した会場(アートプラザ)は、事業実施になくてはならないものであったが、上演、公演の会場としての制約もあった。劇場・ホールとしての設備の高度化によって、事業内容が一層充実できる。

（7） センターの使命、意義の再確認が必要

設置後３年間に、多種多様な事業の企画・実施を行ったが、大学という教育機関の一組織として、固有の学生の育成も求められるようになってきた。学部開設時の使命と意義の再確認が必要である。

1-3 未来像

平成１６年度～平成１８年度の事業報告ではさらに、「芸術文化センターの目指すもの」として、教員それぞれがイメージした５年後の芸術文化センターの未来像をまとめている。

それらは以下のようである(芸術文化センター事業報告,2008,pp.93-94 執筆担当：新倉)。

●ヒューマンネットワークの形成・充実が進み、多様な事業の企画・実施をとおして、地域との連携交流をより深く広く進めている。

・地域・海外・大学・企業・NPO との活発な連携

・地域の人とセンター教員が協働した事業の企画・運営のプロジェクトが始動

●地域の人材育成と学生の教育が結びあった独自の教育及び事業を展開している。

そのための独自の事業、ユニークな企画・教育・事業展開ができている。

・授業開放、センター主催の各種講座などでの、学生と地域住民協働の学びや創造活動

・学生が地域の芸術文化団体などの活動に参加することで単位取得できる実践教育

・学生と教員協働で事業の企画・運営を行い、アートマネジメントの力を育成

・若い芸術家に発表・創造・批評の場を提供し、若い世代の芸術文化活動を活性化

・子どもたちが自発的に芸術文化活動に参加する場を組織し、多くの子どもたちが参加

●鳥取の地域課題に即した教育研究・芸術文化事業を推進している。

・独自に企画・実施した芸術創造プロジェクトや、障がい者を含むユニバーサルな形で、住民が参加できる芸術文化活動の実践を県外・国外でもモデルとして評価、認知

・人口が少なく、高齢過疎が進む地区のモデルとなる芸術文化事業・活動の展開

●以上を支える運営・組織体制が充実している。

・県内外、国内外の芸術文化情報の収集と提供ができる場と仕組み

・豊富な資料と親切な専属職員のアートライブラリーを学生や地域住民に開放

今年度(平成 23 年度)はまさに、平成 18 年度から 5 年目にあたる。芸術文化センターがこのときのイメージとどのように合致し、何が未だ至っていないか、成果はどのように受け継がれ、課題はどう解決されたのであろうか。そして、さらに 5 年後はどのような芸術文化センターが、イメージできるのであろうか。平成 19 年度からから 22 年度の事業報告を見直し、具体的なデータで、そのことへの手がかりを得たい。

２．平成 19 年度から 22 年度の鳥取大学地域学部附属芸術文化センター事業

平成 19 年度から 4 年間の芸術文化センター事業報告に載せられた事業と実施日、会場は表 1-1 から表 1-4 のようであった（芸術文化センターが関わらない教員個人の研究・出品・コンサート等は載せていない)。平成 19 年度２１、20 年度２１、21 年度２８、22 年度３２の事業が年間を通して行われた。これらの事業の中には、毎回異なる内容が数回にわたって開催された事業や、数ヶ月にわたって行われたものもあった。

事業数は、平成 19 年度 21、20 年度 21、21 年度 28、22 年度 32 で、20 年度までと 21 年度からの事業数では、約 1,5 倍の差があった。

表1-1　平成19年度芸術文化センター事業

	事業名	実施年月日	実施場所
1	第4回芸術文化の夕べ	4月29日	鳥大アートプラザ他
2	南村千里コミュニティーダンスws	7月16−18日	とりぎん文化会館リハ室・附属幼稚園
3	アルテフェスタ　声楽演奏会3rd	7月31日	鳥大アートプラザ
4	歌とピアノのコンサート　フッペルは知っている	8月10日	日南町さつきホール
5	こころとからだのharmonyポスター等デザイン		
6	コミュニティアート講座	9月−10月	とりぎんリハ室・わらべ館いべんと・鳥大AP
7	レクチュアコンサート春香−高木東六の音楽遺産	10月19日	鳥大アートプラザ
8	アートフォーラム　白磁の世界	10月21日	やなせ窯
9	レクチュア・コンサートinアートプラザⅡ「吉沢実～笛古今東西」	10月22日	鳥大アートプラザ他
10	こころとからだのharmony	11月4日	とりぎん文化会館小ホール
11	鳥取オペラルネサンス「先人たちの音楽物語」	11月24日	とりぎん文化会館小ホール
12	踊りに行くぜ！！Vol8鳥取公演,ワークショップ	11月24日,25日	鳥の劇場
13	アートフォーラム　場と人間の関係をデザインする	11月28日	高砂屋
14	レク・コンinアートプラザⅢ渡部正行「ノスタルジーと音楽」	12月6日	鳥大アートプラザ
15	アートフォーラム　グラントワが目指すもの	12月7日	鳥大アートプラザ
16	レクチャーシリーズ「山陰ならではのアートマネジメントを探る	12月7日，12日，17日	鳥大アートプラザ
17	レクチュア・コンサートinアートプラザⅣ　wkat is JAZZ	12月14日	鳥大アートプラザ
18	ミュージカル「北風のくれたテーブルかけ」	2月27日	白兎養護訪問・とりぎん小ホール
19	作曲工房「パパゲーノ」～コレクション’８～	3月8日	鳥大アートプラザ
20	「鳥の劇場」観客アンケート調査	19年5月−20年3月	
21	アルティッシモ	3月13日ー15日	とりぎん文化会館小ホール・フリースペース

表1-2　平成20年度芸術文化センター事業

	事業名	実施年月日	実施場所
1	第5回芸術文化のタベ	4月21日	鳥大アートプラザ他
2	アルテフェスタ　ダンスポケット2008春	4月27日	市文化センター多目的ホール
3	アルテフェスタ　JOU＆大樹ワークショップ	6月1日	鳥大共C51・アゴラ
4	こころとからだのharmonyポスター等デザイン		
5	声楽発表会2nd	7月28日	パレットとっとり2F市民交流ホール
6	ヴォルフガング・シュタンゲ“ダンスダイナミクス”ワークショップ	8月6日	とりぎん文化会館リハーサル室
7	鳥取生協病院「七夕コンサート」	8月7日	生協病院
8	歌とピアノのコンサート　フッペルは知っている2008	8月9日	日南町総合文化センター「さつきホール」
9	歌とダンスのW.S.～ミュージカル「オズの魔法使い」を題材に	8月19日-20日	日南町総合文化センター
10	コミュニティアート講座	9月-10月	鳥大アートプラザ、県文、わらべ館
11	アートフォーラム用ポスター等デザイン		
12	「鳥の演劇祭」評価事業	20年5月-21年3月	
13	こころとからだのharmony	11月4日	とりぎん文化会館小ホール
14	鳥取オペラ協会公演イソップオペラ	11月8日	倉吉未来中心
15	紙をすいて家具を作る　パルププロジェクト	5月-12月	中原商店工房、工作車・川端商店街
16	レクチャーシリーズ「芸術文化とまちづくり」	12月3・18日、1月21日	高砂屋
17	アートフォーラム　安田侃講演会	12月16日	高砂屋
18	アートフォーラム　鳥取の木工家具・これまでとこれから	21年1月21-26日	ギャラリーあんどう
19	アルテフェスタ　子どもミュージカル「ヘンデルとグレーテル」	21年2月20・24日	わらべ館、白兎養護学校訪問学級
20	作曲工房「パパゲーノ」～コレクションⅢ’09～	3月7日	とりぎん文化会館小ホール、白兎養護訪問
21	アルティッシモ	3月20日	鳥取市文化センター

表1-3　平成21年度芸術文化センター事業

	事業名	実施年月日	実施場所
1	第6回芸術文化の夕べ	4月20日	鳥大アートプラザ他
2	アルテフェスタ　ダンスポケット2009春	4月26日	鳥大アートプラザ
3	鳥取野外彫刻データマップ作成	21年5月-22年3月	
4	アートフォーラム　辻村寿三郎講演会	5月17日	鳥大アートプラザ
5	朗読と音楽で楽しむ宮沢賢治の世界	5月30日	鳥大アートプラザ
7	アルテフェスタ　演劇をもっと楽しむために	6月22日	鳥大アートプラザ
6	アルテフェスタ　西岡千秋・寺内智子ジョイントコンサート	7月3日	鳥大アートプラザ
8	アートマネジメント人材育成を目的とする国際交流		ルーマニア
9	コンサート～室内楽のたのしみ～	7月11日	鳥大アートプラザ
10	アートフォーラム　私の時代・その出会い角秋勝治講演会	7月17日	鳥大アートプラザ
11	声楽発表会3rd	８月３日	パレットとっとり
12	芸術をかじってみませんか-コミュニティアート講座ー	8月-10月	わらべ館、県文、鳥大アートプラザ・スペース
13	寄付が変える市民社会・寄付が創る芸術文化	9月22日	しかの心
14	鳥取オペラ協会公演フィガロの結婚	10月3-4日	米子市公会堂
15	ダンスポケット2009秋	11月7-8日	とりぎん文化会館小ホール
16	ずぶずぶ・湖山池としての私	11月19-23日	鳥大アートプラザ
17	音の個展Ⅰ	11月14日	鳥の劇場
18	フォーラム　アートとまちづくりの幸せな関係を考える	11月21日	しかの心
19	アルテフェスタ　コレペティトール田島氏による公開レッスン	12月6日	鳥大アートプラザ
20	平成21年度アートフォーラム用ポスター等デザイン		
21	鳥取大学サイエンスアカデミー	12月	県立図書館
22	劇場が社会と共にあるために～ドイツの劇場と文化政策をとおして		
23	21年度青少年のためのオペラ入門	21年12月-22年2月	附属特別支援学校,東郷小学校,鳥取幼稚園他
24	アートフォーラム　彫刻の街倉吉を発信する　倉吉博物館長	2月1日	鳥大アートプラザ
25	アルテフェスタ　子どもミュージカル「いばら姫」	2月19日、24日	白兎養護学校訪問学級、県文小ホール
26	作曲工房「パパゲーノ」～コレクションⅣ’10	3月7日	鳥大アートスペース1
27	芸文センター用パネル2点デザイン		
28	アルティッシモ	3月 22日	とりぎん文化会館小ホール

表1-4　平成22年度芸術文化センター事業

	事業名	実施年月日	実施場所
1	第7回芸術文化のタベ	4月23日	鳥大アートプラザ他
2	春の風景　弦と楽しむ歌の演奏会	4月4日	わらべ館
3	地域の芸術文化資源の把握と情報発信	22年4月-23年3月	
4	アルテフェスタ　ダンスポケット2010春	4月18日	鳥大アートプラザ
5	アダムベンジャミンダンスワークショップ	4月29日	とりぎん文化会館リハーサル室
6	ワークショップはおもしろい	6月27日	米子市公会堂
7	七夕コンサート	7月7,11,17,18日	わらべ館,あおや和紙,生協病院,鳥大アートプラザ
8	川六見学ツアー	7月11日	青谷他
9	アルテフェスタ　歌曲のタベ＆室内楽のタベ	7月28，29日	鳥大アートプラザ
10	星空コンサート音の絵本よだかの星	7月31日	米子市淀江文化センター
11	声楽発表会4th	8月2日	パレットとっとり
12	鳥取オペラ協会公演　フィガロの結婚	8月29日	鳥取市民会館
13	芸術をかじってみませんか-コミュニティアート講座ー	8月-10月	とりぎん文化会館,わらべ館,鳥大アートプラザ他
14	ワークショップデザイナー育成プログラム	22年9月-23年1月	鳥取大学他
15	鳥取市文化財団10周年記念事業仁風閣の樹下美人	10月1日-17日	仁風閣
16	平成22年度アートフォーラム用ポスター等デザイン		
17	鳥取オペラ協会韓国公演	10月18日	韓国　春川市文化芸術館
18	音の絵本コンサート　スーホの白い馬	11月2日,1月29日	鳥取盲学校、米子ふれあいの里
19	ダンスポケット2010秋	11月3日	とりぎん文化会館小ホール
20	アートフォーラム　湯村光講演会	11月7日	倉吉交流プラザ
21	みんなでつくる「ブレーメンの音楽」「ヘンゼルとグレーテル」	11月13日	鳥取産業体育館小体育館
22	鳥取大学サロンコンサートX[iksa]Live in 鳥取大学	11月16日	鳥大アートプラザ
23	ミニ・アートフォーラム「商店街を劇場に	11月29日	芸文センター長室（交流スペース）
24	湖山池　ずぶずぶ　もっと　ずぶずぶ	12月1日-5日	パレットとっとり
25	レクチャー＆ワークショップ「茶の湯としての演劇	12月17日	鳥大アートプラザ
26	劇団衛生公演　珠光の庵	12月17，18日	鳥大アートプラザ
27	H2年度青少年のためのオペラ入門	23年2月17，25日	琴浦町カウベルホール、鳥大附属小
28	アルテフェスタ　子どもミュージカル「ピノキオ」	23年2月18，23日	白兎養護学校訪問学級、県文小ホール
29	アートフォーラム　やなぎみわ講演会	2月20日	鳥大アートプラザ
30	作曲工房「パパゲーノ」～コレクショＶ’11	3月5日	鳥大アートプラザ
31	ハートピアダンス発表会	3月26日	倉吉交流プラザ他
32	アルティッシモ！！	3月20日	とりぎん文化会館（県文）小ホール

2-1　事業内容と事業数

平成 19 年度から、21 年度の事業報告書では、芸術文化センターの事業内容を、講演、上演、展示、制作・創作、調査・研究、ワークショップと、その他の形態に分類、掲載している。事業には、講演と上演が含まれるもの、講演とワークショップが行われるものなど、二つやそれ以上の内容を含むものもあるし、記載はしていないが創作を伴う上演もある。これら明確に分類できないものがあることも含みつつ、今回は事業報告書にあるとおりに集計し、報告する。表 2 は事業の種類と事業数である。比較のために平成 16 年度から 18 年度の 3 年間の数字も加えたものを表示する。講演と上演の括弧内の数字は、外部講師や出演者によるものである。また、上演やワークショップ（WS.）では 2 回以上公演したり、実施したものもあり、回数として表示した。

表 2-1　事業形態と事業数（平成 16 年度～22 年度）

年度	講演（外部）	上演（外部）	回数	展示	制作・創作	調査研究	WS（外部）	回数	その他
16	2(2)	7(1)	8	1	1		3	3	1
17	6(6)	10(2)	11	0	1	2	6(2)	11	2
18	7(7)	15(8)	16	3	2	1	10(7)	11	0
19	9（9）	12（4）	14	0	2	1	5(2)	18	1
20	6（6）	9（1）	15	2	4	1	8(3)	18	1
21	16（9）	16（3）	28	1	6	2	7(3)	18	1
22	7（5）	19（2）	27	2	8	1	12(4)	32	4

以上のように、まず、講演、上演、展示、制作・創作、調査・研究、ワークショップ、その他と前回平成 16 年度から 18 年度の報告同様、多彩な形態の事業が行われた。

事業数では、上演とワークショップ、制作・創作が増えていた。講演、展示、調査・研究は前回の報告と余り変化がなかった。講演は、年度初めや夏期休暇や年度末を除けば、ほぼ 1 ヶ月に 1 度は開催されていた。展示、調査・研究は事業数としてあげられているものは少ないが、報告はあくまでもセンターとしてのものを掲載し、教員個人の研究は報告していないことによる。

〇講演

講演は平成 21 年度は多かったが、それ以外の年度は事業数に大きな変化はなかった。

平成 19 年度の講演は、9 事業あった。これらの講演は 3 つのシリーズとして行われた。それらは、地域貢献支援事業としてのアートフォーラムの 3 事業、レクチャーシリーズの 1 事業 2 講演、大学開放推進事業としてのレクチャーコンサートの 4 事業であった。内容は、鳥取や山陰で活躍するあるいは、山陰出身の講師による、山陰での芸術文化の展開、そこに見られるグローバルな課題を問うものであった。また、そして芸術そのものの楽しみも、参加者に伝えられた。

平成 20 年度の講演は 6 事業、アートフォーラムの 2 事業、レクチャーシリーズの 1 事業 3 講演、複数の形態で行われた「紙を漉いて家具を作る・パルププロジェクト」での 1 講演であった。アートフォーラムのうち一つは展示も含む複合形態で行われた。中四国あるいは全国的な実践が語られた。

平成 21 年度の講演はアートフォーラムの 4 事業、地域の特定非営利法人との共催による 3 事業、芸術文化センター以外の地域学部教員との複合形態による 1 事業、文化庁平成 21 年度「文化芸術による創造のまち」支援事業での上演とともに行われた講演、そして、センター教員全員が 1 回ずつ講演を行う機会を得た「鳥取大学サイエンスアカデミー」の計 16 であった。日本を代表する芸術家による講演と、鳥取の芸術を見続けた評論家、一地域に根ざした芸術文化団体との共催による地域の芸術を支えるものを多方面から考える多彩な講師によるものであった。

平成 22 年度の講演は 7 事業だった。アートフォーラムの 2 事業、上演、展示、見学ツアーなどとの複合形態での 4 事業における講演、ミニフォーラムと称した小さな空間での 1 講演である。鳥取県出身で全国的に活躍している講師、国内外で活躍する芸術家、地域を基盤に活動する講師など学外講師の他、芸術文化センター教員も講師を務めた。

○上演

上演の数、公演数は、特に 21 年度と 22 年度に多くなった。2 回公演以上の上演は、平成 19 年度 1、20 年度 4、21 年度 5、22 年度 6 と年々増え、公演数は倍増した。外部の出演者のみの公演の占める割合は少なく、センター教員が関わって地域で活動する出演者による上演と、これら地域の芸術家と国内外で活動するプロとの共演の占める割合が大きい。

○展示

展示は講演、上演に比べると回数が少なく、0 件の年度もあった。あげられた展示は全て、複合形態の中で行われている。

○ワークショップ

ワークショップは平成 22 年度に多く、一つの事業で複数回の講座を開いているものも多い。4 年間継続して行われたのは、地域貢献支援事業としてのコミュニティアート講座で、芸術文化センター教員の多くが講師として芸術の裾野を広げることを目的に市民に開いた。

○その他

その他は、平成 22 年度で 4 事業、他の年度は 1 事業であった。

鳥取県や鳥取市の芸術文化関係者との交流会「芸術文化の夕べ」は平成 16 年度から芸術文化センターが主催し連続して開催している、平成 22 年度は、それに、文科省からの受託事業(青山学院大学・大阪大学との協力による)の「ワークショップはおもしろい」・「ワークショップ育成プログラム」、「川六見学ツアー」が加わった。新しい事業の可能性として挙げたい。

2-2　月毎の事業実施数

平成 16 年度から 18 年度の報告では、年間の事業計画によって、日程の調整の必要性が挙げられていた。平成 19 年度から 22 年度の事業をその実施月毎の数を上げてみたのが表 2-2 である。これを折れ線グラフにしてみると、図 2- 1 のように、5 月、6 月、1 月そして 9 月に 4 カ年に共通して事業数が少ない。後の月は年度によって様々で、平成 19 年度は 10、11、12 月、20 年度は 8、10 月が 4 事業と多く、21 年度は 12 月が突出して多く、22 年度は 5、6、9、1 月以外は 2 から 5 事業と複数あった。

表 2-2　月毎の事業実施数

	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
4 月	1	2	2	4
5 月	0	0	3	0
6 月	0	1	1	1
7 月	2	1	3	4
8 月	1	4	1	2
9 月	1	1	1	1
10 月	4	4	2	2
11 月	4	2	1	5
12 月	4	2	8	3
1 月	0	2	1	0
2 月	1	1	1	2
3 月	2	2	2	4
数ヶ月	0	2	3	3

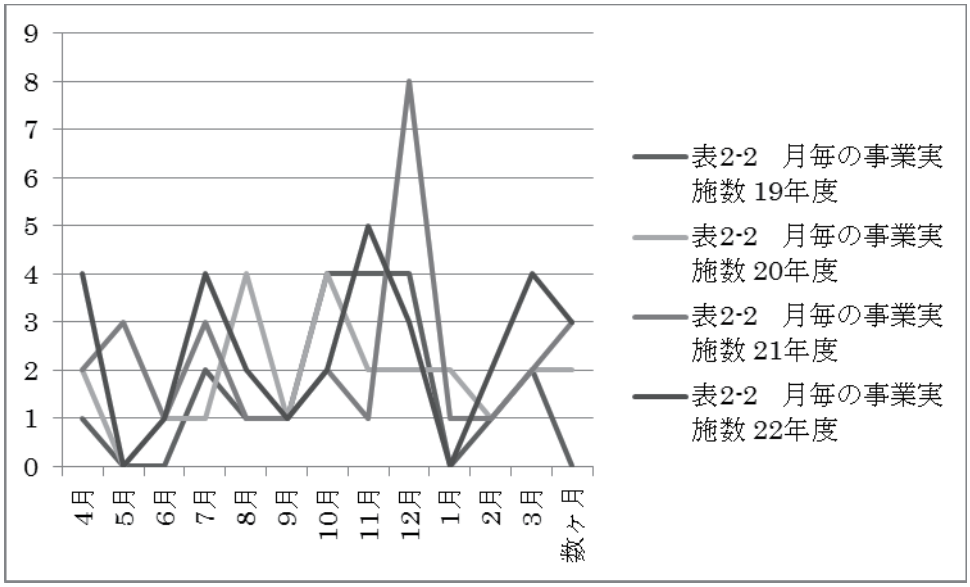

図 2-1　月毎の事業実施数

2-3　実施地域

芸術文化センターの事業を鳥取県全域で実施していくことは、学外からの要望でもあり、センター自身の課題でもある。平成 19 年度から 22 年度の事業が実施された地域を取り出すと、表 2-3 のようである。鳥取県内の他に、平成 21 年度のルーマニアでの調査と、22 年度の韓国での上演があった。

表 2-3 事業実施の地域

年度	東部	鳥取大学		中部	西部
	総数	アートプラザ	その他		
19	21	9	1	0	1
20	21	2	1	2	2
21	36	11	2	1	2
22	39	10	3	5	4

鳥取県中部、西部での実施も増えてきているものの、まだ、東部に大きく偏っている。東部での事業を見ると、改修に当てられた平成 20 年度を除き、アートプラザでの実施が 4 分の 1 を占めている。また、大学以外の場所の利用も多い。大学を市民に開放すること、大学の力を地元に還元できているといえる。

中部や西部で実施された事業の内容を見ると、平成 19 年度の 1 は、日南町での上演、「歌とピアノのコンサート　フッペルは知っている」であった。この事業は 20 年度にも行われている。20 年度には同じ日南町での歌とダンスのワークショップが行われた。ドイツ、フッペル製のピアノが現存していたことがきっかけになった上演と、町民ミュージカルの根付いた町の文化の後押しとしての事業であった。これらの事業は日南町との共催や、日南町主催で行われた。

平成 20 年度の中部での事業は、オペラの上演と、「紙を漉いて家具を作る　パルププロジェクト」と名付けられた事業であった。「紙を漉いて・・」は、東部と中部で行われ、上演、展示、制作、ワークショップと、多彩な事業形態を含むものであった。ここでは、青谷町の和紙工房を始め、智頭町や鳥取市の会社、鳥取市川端商店街、鳥取県立博物館、鳥取市のアートイベントグループなどとの技術や、アイディアのやりとりが行われた。

平成 21 年度と 22 年度では、上演の他、全県を対象とした調査が実施された。21 年度は「鳥取野外彫刻データマップ作成」のための調査、22 年度は「地域の芸術文化資源の把握と情報発信」の調査である。また 22 年度には、東部と中部の狛犬を巡る「川六見学ツアー」が行われ、前年度の調査結果の一部を県民に公開することにもなった。

平成 22 年度はこのほかに、講演、講演を含む上演、ワークショップを含む上演が中部、西部で行われた。また、東部と西部、東部と中部を巡っての上演もあった。

以上のように、わずかではあるが芸術文化センターの事業が全県域に広がろうとしている。そして、大学の芸術文化センター事業としての広がりを実現させたものとして次のことが挙げられる。

◇市町村に残る文化資産、あるいはそこに根付いた文化活動や産業から得た事業へのアイディア、それらを活かす教員の実践力や指導力、市町村の文化関係者との連携

◇全県を対象とした芸術文化に関する調査、研究とその結果を県民に還元する施策と実践力

◇異なる事業形態を複数含んだ事業のアイディアと計画の立案、実践力

◇巡回公演

センターの教員が日常の研究として行う事業である以上、鳥取県の地理的な問題、交通事情が大きな妨げになっている。しかし、調査や連携によって中部、西部の芸術文化に関する情報を得て、事業の実践に繋げること、一つの事業形態の実施に終わらせず、様々な形態の事業を展開して行くこと、巡回開催が今後のセンター活動の地域的広がりへの示唆となる。

2-4　財源

平成 16 年度から 18 年度の 3 年間の事業報告の課題として、安定した財源の確保と柔軟な執行体制が挙げられている。19 年度から 22 年度の報告に見られる各事業の財源は、表 2-4 のようであった。

複数の財源を得た事業もあるが、大学以外の財源の数が増えており、平成 22 年度は、大学の予算を財源とする事業と、国や県、企業等からの財源とする事業数がほぼ同じになった。また、1 事業で 2 カ所以上の財源によるものも、平成 19 年度 3、20 年度 5、21 年度 6、22 年度 12 と増加していた。大学を財源とするものでは、地域貢献支援事業による事業がどの年度も一番多い。これは、一つの地域貢献支援事業の中で、複数の講座や講演、上演を行うものがあり（1 教員の事業に複数の講座や講演、上演が計画されており）、これらの総数が多いということである。その他には、文化団体、学校、病院がその行事として行ったものがある。

表 2-4　事業の財源

年度	大学					大学外				
	総数	センター	地域貢献	大学開放	その他	総数	国	県・市・町	企業	その他
19	16	3	9	5	0	5	1	1	1	2
20	13	5	7	2	0	6	0	3	2	1
21	20	3	9	3	4	11	1	6	3	1
22	20	5	13	3	1	21	2	12	3	4

2-5　事業主体

芸術文化センターが主催した事業、共催、後援、協力した事業数は表 2-5 のようであった。また、センターと共催したり、センターが協力、後援した事業主体は表 2-6 のようであった。

平成 21 年、22 年はそれまでと比べて共催が多くなっている。協力や後援も 22 年では増えている。増えている相手先は、文化施設や学校、企業である。

表 2-5　事業主体

年度	主催	共催	後援	協力
19	16	3	0	0
20	17	3	0	2
21	18	10	1	1
22	21	9	2	5

表 2-6　共催、協力、後援先

年度	実行委員会	県・市・町・村	文化団体	学会	文化施設	NPO法人	学校	企業	病院
19	4	5	2	1	0	1	0	0	0
20	1	3	4	1	1	1	0	0	1
21	2	2	7	0	0	4	0	2	0
22	4	4	4	0	5	0	2	2	0

2-6　参加者

講演、上演、展示、ワークショップの参加人数として記録されているものの合計は以下のようであった。

平成 19 年度：2,450 人、20 年度：2,636 人、21 年度：5,250 人、22 年度：7,492 人

平成 22 年度は 19 年度の約 3 倍の人が、講演や上演、展示の観客となり、ワークショップに参加した。また、出演者としての参加もこの中には含まれる。

学部の授業「ミュージカル」で学生が制作し、演じる「こどもミュージカル」は毎年、3 回の公演を行い、地域の幼稚園児や、特別支援学校のこどもたちを招待している。そして、観客として以外にも、上演、ワークショップ、では、障がい者の参加や、様々な年齢層の参加、青少年を対象に育成の目的を持ったものが継続して行われていたり、新たに加わったりしている。

平成 19 年度では、年齢の違いや障害のある人も無い人も一緒に(以後「様々な個性の」と表記する)作品を発表するダンス公演が 1 、「コミュニティアート講座」などワークショップが 2、障がい者への上演 1、「作曲工房『パパゲーノ』」など育成を目的の一つとする上演が 4 あった。20 年度には、様々な個性の出演者によるダンス上演 2、ワークショップ 2、病院の患者や障害者への上演 2、育成型 4 になった。21 年度は、様々な個性の出演者 2、ワークショップ 1、患者、障がい者への上演 3、育成型が 5 と増えた。22 年度では様々な個性の出演者によるダンス上演が 3、様々な個性の参加者を対象としたワークショップ 3、患者、障がい者への上演 3、育成 4 であった。

表 2-7　様々な参加対象への事業

年度	様々な個性の出演者による上演	様々な個性の人へのワークショップ	患者、障がい者への上演	青少年への育成型
19	1	2	1	4
20	2	2	2	4
21	2	1	3	5
22	3	3	3	4

観客の年齢層、地域について、共通の調査は行っていない。

2-7　教員の共同

音楽、美術、舞踊、アートマネジメントなどの異なる専門分野を持つ、芸術文化センターの教員が、二人以上で関わった事業数を見た。

事業に複数の教員が関わっているものは、平成 19 年では 5 事業、20 年度 5、21 年度 10、22 年度 12 のように増えている。21 年度、22 年度では、事業の 3 分の 1 が複数の教員が関わっているものであった。

4 年間連続で、全員が関わっているのは、芸術文化の夕べで、県や市の芸術文化関係者との連絡会である。また、コミュニティアート講座では芸術文化センターの 4 から 5 人の教員が関わって、様々な芸術の分野の講座を一般市民に向けて開いている。芸術文化センターの特徴を活かした一つのあり方である。

2-8　芸術文化センターの事業への学生の参加

平成 20 年度、芸術文化センターでは、新たに地域文化学科の 1 コースとしての芸術文化コースの学生 4 人を受け入れた。このコースができるまでは、研究科の学生がいるのみであった。芸術文化センターの事業数が、平成 20 年と 21 年を境に 1,5 倍に増えた。この原因の一つに、学生の受け入れと、この学生たちのセンター行事への参加がある。

地域学部地域文化学科芸術文化コースの新設に当たり、学生には、芸術文化センターやセンター教員が主催する公演、展示、上演などの事業にスタッフや、出演者として関わらせ、地域と芸術を結ぶ実践的な学習の場としたいとの思いがあった。センター事業のうち、講演系のアートフォーラムは「芸術と地域ゼミ」と、上演系のアルテフェスタを「地域芸術実践ゼミ」と関連づけることによってその実現を図った。

表 2-7 から表 2-10 は学生の事業への参加の様子を表したものである。出演と、講演や上演のスタッフとしての参加を示した。なお、（○）は芸術文化コース以外の学生を示す。

表2-7　平成19年度芸術文化センター行事への学生の参加

	事業名	スタッフとして参加	出演等参加	
			大学院生	学部生
1	第4回芸術文化の夕べ			
2	南村千里コミュニティーダンスws			
3	アルテフェスタ　声楽演奏会3rd		○	
4	歌とピアノのコンサート　フッペルは知っている			（○）
5	こころとからだのharmonyポスター等デザイン			
6	コミュニティアート講座	○		
7	レクチュアコンサート春香-高木東六の音楽遺産	○	○	
8	アートフォーラム　白磁の世界			
9	レクチュア・コンサートinアートプラザⅡ「吉沢実～笛古今東西」			
10	こころとからだのharmony		○	
11	鳥取オペラルネサンス「先人たちの音楽物語」	○	○	（○）
12	踊りに行くぜ！！Vol8鳥取公演,ワークショップ		○	
13	アートフォーラム　場と人間の関係をデザインする			
14	レク・コンinアートプラザⅢ渡部正行「ノスタルジーと音楽」			
15	アートフォーラム　グラントワが目指すもの			
16	レクチャーシリーズ「山陰ならではのアートマネジメントを探る			
17	レクチュア・コンサートinアートプラザⅣ　wkat is JAZZ			（○）
18	ミュージカル「北風のくれたテーブルかけ」		○	（○）
19	作曲工房「パパゲーノ」～コレクション’８～	○	○	（○）
20	「鳥の劇場」観客アンケート調査			
21	アルティッシモ		○	

表2-8　平成20年度芸術文化センター行事への学生の参加

	事業名	スタッフとして参加	出演等参加	
			大学院生	学部生
1	第5回芸術文化の夕べ			
2	アルテフェスタ2008ダンスポケット2008春		○	
3	アルテフェスタ　JOU＆大樹ワークショップ			
4	こころとからだのharmonyポスター等デザイン			
5	声楽発表会2nd		○	
6	ヴォルフガング・シュタンゲ“ダンスダイナミクス”ワークショップ			
7	鳥取生協病院「七夕コンサート」		○	
8	歌とピアノのコンサート　フッペルは知っている2008		○	（○）
9	歌とダンスのWS～ミュージカル「オズの魔法使い」を題材に		○	
10	コミュニティアート講座	○		
11	アートフォーラム用ポスター等デザイン			
12	「鳥の演劇祭」評価事業			
13	こころとからだのharmony		○	
14	鳥取オペラ協会公演イソップオペラ		（○）	（○）
15	紙を漉いて家具を作る・パルププロジェクト　WSと作品展示			
16	レクチャーシリーズ「芸術文化とまちづくり」			
17	アートフォーラム安田侃講演会	（○）		
18	アートフォーラム鳥取の木工家具・これまでとこれから			
19	アルテフェスタ　子どもミュージカル「ヘンデルとグレーテル」		○	（○）
20	作曲工房「パパゲーノ」～コレクションⅢ’09～		○	（○）
21	アルティッシモ	○	○	

表2-9　平成21年度芸術文化センター行事への学生の参加

	事業名	スタッフとして参加	出演等参加	
			大学院生	学部生
1	第6回芸術文化の夕べ			
2	アルテフェスタ　ダンスポケット2009春	○	○	
3	鳥取野外彫刻データマップ作成			
4	アートフォーラム　辻村寿三郎講演会	○		
5	朗読と音楽で楽しむ宮沢賢治の世界	○	○	
7	アルテフェスタ　演劇をもっと楽しむために	○		
6	アルテフェスタ　西岡千秋・寺内智子ジョイントコンサート	○		
8	アートマネジメント人材育成を目的とする国際交流			
9	コンサート～室内楽のたのしみ～	○		
10	アートフォーラム　私の時代・その出会い角秋勝治講演会	○		
11	声楽発表会3rd		○	
12	芸術をかじってみませんか-コミュニティアート講座一	○		
13	寄付が変える市民社会・寄付が創る芸術文化			
14	鳥取オペラ協会公演フィガロの結婚	○	○	
15	ダンスポケット2009秋		○	
16	ずぶずぶ・湖山池としての私	○	○	（○）
17	音の個展Ⅰ	○	○	（○）
18	フォーラム　アートとまちづくりの幸せな関係を考える			
19	アルテフェスタ　コレペティトール田島氏による公開レッスン			
20	平成21年度Aフォーラム用ポスター等デザイン			
21	鳥取大学サイエンスアカデミー			
22	劇場が社会と共にあるために～ドイツの劇場と文化政策をとおして			
23	21年度青少年のためのオペラ入門		○	○
24	アートフォーラム　彫刻の街倉吉を発信する　倉吉博物館長	○		
25	アルテフェスタ　子どもミュージカル「いばら姫」		○	○
26	作曲工房「パパゲーノ」～コレクションⅣ’10	○	○	○
27	芸文センター用パネル2点デザイン			
28	アルティッシモ	○	○	○

表2-10 平成22年度芸術文化センター行事への学生の参加

	事業名	スタッフとして参加	出演等参加	
			大学院生	学部生
1	第7回芸術文化の夕べ			
2	春の風景　弦と楽しむ歌の演奏会	○	○	
3	地域の芸術文化資源の把握と情報発信			○
4	ダンスポケット2010春			
5	アダムベンジャミンダンスワークショップ			
6	ワークショップはおもしろい			
7	七夕コンサート	○	○	
8	川六見学ツアー			○
9	アルテフェスタ　歌曲の夕べ＆室内楽の夕べ	○	○	
10	星空コンサート音の絵本　よだかの星		○	
11	声楽発表会4th		○	
12	鳥取オペラ協会公演　フィガロの結婚		○	
13	芸術をかじってみませんか-コミュニティアート講座ー	○		
14	ワークショップデザイナー育成プログラム			
15	鳥取市文化財団10周年記念事業仁風閣の樹下美人			
16	平成22年度アートフォーラム用ポスター等デザイン			
17	鳥取オペラ協会韓国公演			
18	音の絵本コンサート　スーホの白い馬		○	○
19	ダンスポケット2010秋		○	○
20	アートフォーラム　湯村光講演会	○		
21	みんなでつくる「ブレーメンの音楽」「ヘンゼルとグレーテル」		○	○
22	鳥取大学サロンコンサートX[iksa]Live in 鳥取大学	○		
23	ミニ・アートフォーラム「商店街を劇場に」			
24	湖山池　ずぶずぶ　もっと　ずぶずぶ	○	○	
25	レクチャー＆ワークショップ　「茶の湯としての演劇」	○		
26	劇団衛生公演珠光の庵	○		
27	H2年度青少年のためのオペラ入門		○	○
28	アルテフェスタ　子どもミュージカル「ピノキオ」		○	○
29	アートフォーラム　やなぎみわ講演会	○		
30	作曲工房「パパゲーノ」～コレクショⅤ’11	○	○	（○）
31	ハートピアダンス発表会		○	
32	アルティッシモ！！	○	○	○

平成20年までの学部生の参加は、地域文化学科及び、他学科、他学部の生徒であった。これが、芸術文化コースの学生を受け入れた21年度では28事業中5事業への出演を含め14事業、22年度では32事業中8事業への出演を含め20事業に学部生が関わった。

学部学生の事業への参加は、芸術文化コースの1期生が入学した平成21年には、センター事業のスタッフとしてのものが主であったが、中には演奏などで出演もした。

スタッフとしての参加内容は、会場設営、入場者受付準備、受付、会場整備、音響、照明、進行助手、資料配付、ビデオ撮影等で、それらを体験しながら、講演や上演の内容も視聴した。センター教員にとっても、事業の運営を大いに助けられた。

1期生が2年生になった22年度には、スタッフとしての参加以外に、教員とともに調査に携わったり、センター教員が行った上演事業17のうち8に参加するなど、地域における芸術活動を直接体験した。センター教員の研究、調査の実施、上演のアイディアや実現が、学生に支えられた部分が少なくない。

学生はこれらの経験をもとに、自らの手で、「小さな展示会」の実験的開催、修了生や卒業生を中心とした音楽と舞踊の発表会「アルティッシモ」の計画から実施へと力をつけていっている。

大学院生は、19年度から22年度まで、センター教員とともに多くの事業に参加しているが、21年度から新たに加わった学部生とともに、あるいは学部生と教員の研究をつなぐ立場でセンターの事業に関わっている。

このように、教員、大学院生、学部生がともに地域における芸術文化を考え、創り、実施するという形ができつつある。センター事業が、学生にとっては、実践的学習の場であると同時に、事業を通して新たな知識を獲得し、自ら考え出す力を伸ばす機会となり、教員にとっても学生の存在が研究、制作や創作、上演の可能性を広げてくれるという好循環を生み出す可能性がすでに見える。

３．平成19年度から22年度芸術文化センター事業報告書に見られる成果と課題

前回の報告書（平成16年度から18年度）に挙げられた事業数は、平成16年度12、17年度25、18年度29であった。17年度と18年度は、地域の文化活動者による任意団体「アーツデザインとっとり」と連携、鳥取県、（財）地域創造の助成による「鳥取パフォーミングアーツ（通称 TOPA）」の一環として実施した事業が17年度6、18年度7事業あり、国内外の優れた舞台芸術の招聘及び連続講座、アーティストインレジデンスなどが行われた。今回の報告書では、多くの事業を開催するような連携はなかったが、平成19年度21、20年度21、21年度28、22年度32で、20年度までと21年度からの事業数では、約1,5倍と増加し、18年度や19年度の事業数を超えて実施された。

3-1 平成19年度から22年度芸術文化センター事業の成果

事業を事業形態、月ごとの実施数、実施地域、財源、事業主体、参加人数、そして事業への学生の参加の様子を単純集計した。その結果は以下のようであった。

○講演、上演、展示、制作・創作、調査・研究、ワークショップ、その他と多彩な形態の事業が行われた。

○事業数では、上演とワークショップ、制作・創作が増えていた。講演、展示、調査・研究は前回の報告と余り変化がなかった。

○月毎の事業実施数では5月、6月、1月そして9月が4カ年に共通して事業数が少ない。

○事業の実施地域では、鳥取県中部、西部での実施も増えてきている。

○財源では大学以外の財源の数が増えており、平成 22 年度は、大学の予算を財源とする事業と、国や県、企業等からの財源とする事業数がほぼ同じになった。
○平成 19、20 年度のほとんどの事業が主催事業であったのに比べて、平成 21、22 年度では共催が多くなり、協力や後援も 22 年では増えている。増えている相手先は、文化施設や学校、企業である。
○平成 22 年度は 19 年度の約 3 倍の人が、講演や上演、展示、ワークショップに、出演、観客などの形で参加した。事業数 1,5 倍に比べると、参加者の増加は大きい。
○事業に複数の教員が関わっているものは、平成 19 年では 5 事業、20 年度 5、21 年度 10、22 年度 12 のように増え、21 年度、22 年度では、事業の 3 分の 1 が複数の教員が関わっているものであった。
○平成 21 年度より、地域文化学科に芸術文化コースが新設され、21 年度では 28 事業中 14 事業、22 年度では 32 事業中 20 事業と、多くのセンター事業に学部生が参加した。

また、県域への広がりに関しては、事業の内容等と照らして検討した結果、事業展開に次のような示唆と、芸術文化センターにはそれを実施する潜在能力があることもわかった。
○調査研究の実施や文化団体、市や町、企業などとの連携によって中部、西部の芸術文化に関する情報を得、それらを事業の計画実践に繋げる。
○一つの事業形態の実施に終わらせず、様々な形態の事業を展開する。
○上演事業を巡回開催する。

3-2 平成 16 年度から 18 年度の 3 年間の事業報告での課題からの検討

平成 16 年度から 18 年度の 3 年間の事業報告で五島があげた課題と照らすといくつかの示唆とさらなる課題があった。

（1） 実施日程調整、事業計画の検討、事業評価

実施日程の調整や２，３カ年にわたる事業計画の検討、事業評価などを通しての計画的な事業の実施に関しては、事業実施時期や、事業形態の偏りの結果を見る限りではもう少し検討が必要である。また、この問題については、調査研究やその他の情報収集を通しての地域のニーズの把握と、教員の研究に基づいた事業計画、多様な事業形態での長期間にわたる事業展開、巡回開催などが検討の手がかりとなりそうである。

（2）事業の実施・運営体制の充実、

前回の報告書では、活動による情報蓄積を活かした広報、集客法の効率化と充実、教員相互の連絡と協力によるスムーズな事業運営、事務局的なスタッフや当日運営スタッフの充実、メディアとの協力体制の拡充による広報の充実が、課題としてあがっている。

集計結果からは見えない部分も多いが、事業への参加者が事業数の増加率に比べて 2 倍になっていることは、広報、集客法の改善の結果とも取れる。

複数の教員が計画実施に関わった事業が、全体の 3 分の 1 になっているほか、集計結果にはないが、1 教員が実施した事業でも、ポスターデザイン、当日の援助など、教員相互の連携もかなりうまくいっていた。

さらに、芸術文化コースの新設によって、教員、大学院生、学部生がともに地域における芸術文化を考え、創り、実施するという形ができつつあることも、センターの力を大きくするものと

して期待したい。

（3）参加者の拡大と充実

参加者に関して、広報による学内への周知広報、湖山地区住民との連携推進の必要性があげられている。学内、湖山地区の住民がどれだけあったかの資料はなく、今後の取り組みが必要である。

また、事業内容には、センター以外の本学部教員との連携事業が平成 21 年度 1、22 年度 3 がある。このような形の事業も研究の交流とともに、今後の参加者充実への可能性がある。しかし、芸術文化センターが主催し、本学のアートプラザで開催した事業に、観客として参加する本学の職員・学生が多いとは言えないのが現状である。

（4）安定した財源の確保と柔軟な執行体制

学内予算の安定的な獲得、学外予算獲得の努力と実績づくり、芸術文化事業執行のための事務手続きの柔軟性という前回の課題のうち、学内学外予算の獲得に関しては、かなり努力できたと評価できる。

財源の執行の柔軟性に関しては、センターの努力では実現できないところがある。人件費、謝金に関しては、大学の基準による限界があり、国や県の補助事業では事業報告後でなければ補助金が支給されないなど、事業執行へのハードルは大きいままである。

（5）連携と交流を促進する仕組みの試行と確立

これは、芸術文化センター事業への参加者との連携と交流を問題にしていた。このことに関しては、観客アンケートをいくつかの事業で行っているにとどまっていると思われる。さらに検討の必要がある。

（6）施設の充実

平成 21 年度には耐震工事とともに、芸術文化センターの施設も大きく変わった。

芸術文化センターは教員の居室、学生の演習室以外に、センター長室兼交流スペース、アートスペースⅠ、Ⅱ、Ⅲ、アンサンブル室と入り口のホールを持つ施設に生まれ変わった。アートプラザは、全学の施設となったが、その管理運営はセンターが担うこととなった。

センター長室兼交流スペースは、様々な打ち合わせや会議室、ミニ講演会、講師控室、上演の出演者控室、事業のための準備室、講義室等々として活用されている。

アートスペースⅠは上演系の、アートスペースⅡとⅢは美術系の実習の場である。ここでは、教員や学生の研究・制作活動、実習、講義の他、小さな上演や講演も行われる。「芸術をかじってみませんか」などの講座の開催で、地域の人たちにも使われている。

アンサンブル室は、楽器棚と小さな演奏スペースである。上演時には控室や、練習室としても使用される。

入り口ホールには、24×3 段のフライヤー棚を設置した。ここでは、芸術文化センター事業を始め、県内外で行われる展示、上演、講演等の情報が得られるようになっている。
学外からのフライヤーの持ち込みや、学内の教員や学生、学外からの訪問者が立ち止まってフライヤーを手にする姿がある。ホールの壁には、過去行われた芸術文化センター事業の写真パネルも展示した。

アートプラザには、音響、照明、プロジェクター、可動式の椅子の設備がなされ、講演、上演事業で地域の人たちに開放されている。講義や上演練習にも使われている。プラザのスペースの使い方も事業によって様々に工夫され、舞台部分を客席にしたり、フロアに特設舞台を設置した

り、外部の講師や、出演者との共同で、その可能性を広げている。施設面での不足はあるが、身近なホールとして活用価値は高く、平成21年度からは、鳥取県東部で行われるセンター事業の4分の1がアートプラザで行われて、学外に開放されている。

（7）センターの使命・意義の再確認

センター設置から7年間が過ぎた。学部開設時のセンターの設置目的と、これからのセンターの使命、意義を再確認しなければならない。このことについて、新倉がまとめた、芸術文化センターの教員が描いた5年後の芸術文化センターの未来像と照らして考察したい。

●ヒューマンネットワークの形成・充実、多様な事業の企画・実施、地域との連携

このことに関しては、かなり進められていると評価できる。

例えば平成22年度に第7回となった芸術文化の夕べでは、鳥取県、鳥取市の芸術文化関係者との情報交換にも、芸術文化センターと、各機関との連携事業や委託事業の報告も多くなっている。

事業形態も様々なものが展開されており、複合形態で行われる事業も多い。

また、テーマを「山陰」から「中四国」、そして「鳥取の1地域のまちづくり協議会や地域で活動する劇場との連携により、全国的な課題へ」目を向けていくなど、年度を超えて継続的な企画を持つ事業や、鳥取に根を持ちながら全国展開する芸術家、世界的に活躍しながら地域を見ている芸術家の活動を紹介する講演や上演事業もおこなった。

●地域の人材育成と学生の教育が結びあった独自の教育や事業

平成21年度より、地域文化学科に芸術文化コースが新設され、センター事業の多くに学部生が参加するようになった。22年度では32事業中15事業に学部生が関わって、スタッフや出演者として、経験を深め、地域の人々と芸術のあり方を実践的に学ぶ場となっている。また、学部生が出演した事業をこどもたちの前で上演したり、制作・創作、上演など、教員による人材育成事業にも学部生、院生、卒業生、その他、地域の若い芸術家が参加するなど可能性が広がっている。

●鳥取の地域課題に即した教育研究・芸術文化事業の推進

独自に企画・実施した芸術創造プロジェクトや、県外・国外でもモデルとして評価、認知される事業が行われたかは、今後の事業の継続、発展によると思われる。

様々な個性の出演者による上演や、様々な個性の参加者を対象としたワークショップ、病院や障がい者への上演は継続して行われていた。年々事業数が増加している。

人口が少なく、高齢過疎が進む地区のモデルとなる芸術文化事業・活動の展開に関しては、日南町での試行的な事業以外は未だ達成していない。どのように事業に参加してもらうかの検討がまず必要である。

●以上を支える運営・組織体制の充実

県内外、国内外の芸術文化情報の収集と提供ができる場と仕組みに関しては、芸術文化センターの入り口に、県内外の芸術関係のフライヤーを置く棚の設置が挙げられる。

そのほかHPでの情報発信については、センター関連のもの以外は行えていない。

豊富な資料と親切な専属職員のアートライブラリーを学生や地域住民に開放するという夢は未だ実現を見ていない。

終わりに

芸術文化センターが取り組んだ4年間の事業を振り返ることによって、センター教員が自らの研究の一環として取り組んだ、地域と芸術文化を結ぶ方法に二つの方向性があることが見えてきた。一つは地域を対象として捉え、芸術を巡る課題を考察し、芸術ができることを提示しようとするものである。これは、「地域を考える」「地域を捉える」「地域を取り戻す」と概観されているような地域学のアプローチ（柳原他　2011）の実践研究である。もう一つは文化や人や行政などを含む地域生活そのものに育まれながらそこで自らの芸術を生み、展開するという、言わば地域の中から芸術を探求するものである。この立ち位置は、人が育ち、学び、生きる場としての地域社会を、学校教育・社会教育、社会福祉、文化活動、行政などの総合的な研究の場として取り上げた教育学部時代の本学の先行研究に共通するものがある（田結庄　1995）。芸術文化センターの教員７名のうち５名は教育学部からの教員である。これまでの芸術文化センターの事業の多くは、地域で文化を育てるという教育学的研究課題を、地域学的視点で点検しつつ、地域貢献、生涯教育といった新たな研究課題として拓こうとしてきたと捉えられる。

しかし、多様な事業を多数実施してきたが、「参加者が固定化している」「学内からの参加者が少ない」「学内の他の教員を巻き込めていない」等、事業のひろがりが見られないのではないかとの反省もある。芸術文化センターが実施してきた多様な事業が、社会貢献として、果たして社会のニーズにマッチしていたのかという観点からの事業の見直しや、事業内容そのものの評価と学内への発信さらに、これらの事業を地域学部の方向性の中に位置づける事ができているのかについて、今後さらに検討すべき課題が残されている。合わせて、事業の持続的、計画的な実施が可能なのかという点についても、「資金が不足」「マスコミ対応が弱い」「教員が忙しすぎる」「時間をかけた研究に取り組めない」など様々な課題がある。芸術文化センターの今後の方向性をどう定めていくべきか、合わせて、来年度に完成年度を迎える芸文文化コース及び、大学院地域創造専攻地域文化分野の学生の教育研究をいかに充実させるかを引き続き検討する必要がある。

最後に、事業報告作成にあたり、全体編集、表紙デザインに関わってくださった小松亜希恵さんに謝意を表したい。

文献

鳥取大学附属芸術文化センター事業報告　平成 19～22 年度
鳥取大学附属芸術文化センター事業報告　平成 16～18 年度
田結庄順子編著　地域社会に育ち・学び・生きる　山陰地域における福祉と教育環境の問題　多賀出版　1995
柳原邦光他編著　地域学入門ー〈つながり〉をとりもどすー　ミネルバ書房　2011

（2012 年 2 月 3 日受付，2012 年 2 月 10 日受理）